

学び・学校・居場所

オルタナティブな学びと居場所が両立する場を考える

阿比留久美

あびる くみ
早稲田大学
社会教育の視点から子ども若者の学校外の学びと社会的移行を
研究しています
著書:『子どものための居場所論』(かもがわ出版、2022年)
『孤独と居場所の社会学』(大和書房、2022年)など

学校への願いと現実とのギャップの拡大

近年、オルタナティブな学びや「居場所」ある学校を
実現していくことへの関心が高まっている。たとえば二
〇一六年の教育機会確保法成立により、いわゆる「学
校」(一条校)にとられず多様な学びを実現するため
の条件整備を具体的に検討していく段階になっている。
同時に、二〇一〇年代になってからは、一条校の中でも

独創的で豊かな学びをつくろうという動きが、星槎もみ
じ中学(北海道)、青翔開智中学校・高校(鳥取県)、大
日向小学校・中学校(長野県)、まおい学びのさと小学
校(北海道)、軽井沢風越学園(長野県)などで活発に展
開されている。

そのようなオルタナティブな教育の実現可能性が増し
ているものの、全体としてみた時の子どもたちの状況は
かんばしくない。

たとえば、二〇二二年度のいじめの認知件数は六八万

一九四八件、暴力行為の発生件数は九万五四二六件とど
ちらも過去最多を記録している。不登校児童生徒数は二
九万九〇四八人(二〇二二年度は二四万四九〇人)で前
年度比二二・一%増となっている。小学校では五九人に
一人、中学校では一七人に一人が不登校となっている計
算になる。通信制高校や単位制高校など多様な選択肢が
存在している高等学校においても、その数は六万五七五
人で五〇人に一人が不登校という状況だ。(文部科学省二
〇二三)。いじめや暴力行為は、教師が認知したり関与
した件数が統計にあがっているので、数字だけを見て過
去最悪の状況だとはかならずしも言えないし、不登校に
なることそのものが「問題」だとはかならずしも言え
ない。

しかし、このような学校における「問題状況」のデー
タは、子どものストレスのあらわれであると見るのが妥
当であろうし、近年のオルタナティブな学びの場の形成
やそこへの注目の高まりには、多くの人びとが現実とは
異なる学校や学びのあり方を求めているということが言
えるだろう。そこで、本稿では、オルタナティブな学び
の場を土台にしながら、「学び」と「居場所」が両立す
るような場について考えていきたい。

「学校」と「居場所」をめぐる錯綜

学校に行く／行かないことと「居場所」とが結びつ
けられるのは、一九八〇年代に不登校が急増した学校に行
かない／行けない子どもが昼間に通うフリースクール・
フリースペースが、みずからの活動を「居場所」と称し
たことに端を発している(たとえば奥地圭子一九九二)。
その傾向は、学校不応対策調査研究協力者会議報告
(一九九二)の中で、不登校はどの子どもにも起こり得
るものであり、学校が子どもにとって「心の居場所」に
なることが必要であると発表されて以降、行政でも民間
でも強化され、現在では定着したトレンドである。

学校をめぐる言説のあちこちで「居場所」が論じられ
ており(深谷昌志二〇〇三など)、ここでは学校をめぐる
「学び」と「居場所」との関係が錯綜し、異なる位相の
ものが同じ組上に乗せられながら論じられている。

筆者は、別稿で「居る」ことと「場所」をめぐる視点
として、①「居たい」場所、②「居られる」場所、③
「居なくてはいけない場所」の三つをあげて考察をして
いる。「居たい」場所とは当事者がその場所に心情的に